

《資料紹介》

中世ロシアの占卜書「ラフリ」に

ついて

中村喜和

はじめに

十六世紀の初め以来ロシアに「ラフリ」と呼ばれる占いの書物の存在したことが知られている。それは当時の文献「家庭訓」と「百章」の双方においてキリスト教徒には有害なものとして判定され、禁書あつかいをされてきた。

「ラフリ」という名称の由来をたずねれば、それはギリシヤ語の *phantasia* から出た言葉であり、さらにさかのぼればアラビア語の *raml* (砂、謎) に到達する、という説が十九世紀以来定説のように¹⁾なっている。

右にあげた二つの文献の中で、「ラフリ」は「アリストテレスの門」と呼ばれる書物と並んで挙げられている。後者は古代ギリシヤの哲学者に仮託された占卜書であったらしい。十五世紀の末ごろからノヴゴロドで「ユダヤ派」と呼ばれる異端運動がおこったとき、これらの書物がロシアに

持ちこまれたのではないか、という考えも一般に承認されている。

本稿は中世ロシアの一社会事象として「ラフリ」の内容を紹介することを目的としている。事柄は些細に見えるが、その背後にはロシアとビザンツ、さらには地中海世界や西ヨーロッパとの文化的なつながりという下地のあったことがよくわかる。

(1) 後述トウリーロフらの論文でA・ヴェセロフスキイにはじまる「ラフリ」研究史の簡単な紹介が行なわれている。

一 「家庭訓」は十六世紀の初めに商業都市ノヴゴロドで成立した「第一編集」と、ノヴゴロドの出身でモスクワのイワン四世(雷帝)に仕えたクレムリン付き司祭シリヴェストルの手になる「第二編集」の二つの系統の写本が存在するが、前者では第八章、後者では第二十三章に「ラフリ」への言及がある。いずれも「キリスト教徒は病いとあらゆる不幸からいかに免れるべきか」と題された章で、その中で「ラフリ」は、妖術、魔術、幻術、星占い、まじない、カラスの鳴声占い、のろいかげ等々の「あらゆる悪魔の奸計」もろとも、キリスト教徒のタブーとして挙げられている¹⁾のである。

(1) 第一編集と第二編集はそれぞれ最近になってべ

テルブルグのコーレンソフ教授らによって刊行され、一般の読者に近づきやすくなった。B. B. Капелов и др. *Домострой*. М., 1990; B. B. Капелов и др. *Домострой*. М., 1991. 日本語訳としては佐藤靖彦氏による「ロシアの家庭訓(トモストロイ)」、新書館、一九八四年、がある。

二 「百章」は一五五一年にモスクワで開かれた宗教会議の議事録である。その第四十一章の中の第十七問として、イワン四世が次のように問いかけている。これは「ラフリ」の性格をよく示す内容をもっているので、長さを問わず引用しておく。

我ら正教国では争いは裁判で裁くことになっているが、中には相手を誹謗中傷し、十字架や聖像に誓いの接吻をしてから決闘を行ない、血を流す者がいる。そのさい、悪魔の唆しによって占い師や妖術使いが彼らに手を貸している。つまり、彼らは魔術を使って「アリストテレスの門」や「ラフリ」で占い、星や惑星を見て決闘の日時を選んでいく。かかる悪魔的所業によって彼らは俗界を惑わし、人々を神から引き離すのであり、その結果、中傷者は魔術に望みをかけ、和解することなく十字架に接吻して決闘し、相手を誹謗中傷した上で殺し合っている。

この諮問に対して、宗教会議に集まった聖職者たちが「異端は完全に踏みこむべきである」とし、「悪魔的妖術を受け入れる正教徒は……ことごとく教会から追放されるべきである」と答えたことは当然である。

(1) 中村喜和他訳、「百章」試訳、「一橋大学研究年報人文科学研究30」六〇～六一頁。ここで用いた底本は A. Д. Горский (ред.), *Российское законодательство образования и укрепления Русского централизованного государства*. М., 1985, стр. 307.

三 念のためにひと言。「家庭訓」の編者ならびにイワン四世が「ラフリ」や各種の魔術を非難したからといって、彼らが近代的な意味での合理主義者だったわけではない。イワン四世の父方の祖母は東ローマ帝国最後の皇帝コンスタンチノス十一世の姪ゾエであった。ゾエは父親の亡命先のローマから、モスクワのイワン三世のもとに嫁いできたのである。彼女はロシア風に名をソフィアと改め、夫の先妻がのこしたイワン大公とその子をさしおいて自分の生んだワシリーに皇位を継がせるべく、熱心に運動した。手段をえらばぬ強引さのおかげで、その企みは成功する。イワン四世の論敵クルプスキイが後世に伝えた「ギリシヤ

の魔女」という評判は、彼女の生前からあったものらしい。イワン四世の母方の祖母アンナ・グリンスカヤも魔女と呼ばれた。一五四七年のモスクワの大火がアンナの魔術のせいとされ、暴徒から追求されたのである。

雷帝と呼ばれたイワン四世自身、みずからの身边に「魔術師」たちをはべらせていた。臨終が迫ったとき、彼らに「計算」させて死の時刻を知ろうとしたことが、当時モスクワに滞在していたイギリス人ジェローム・ホーシイ卿の手記の中に述べられている⁽¹⁾。

(1) L. E. Berry, R. O. Crumney, *Rude and Barbarous Kingdom. Russia in the Accounts of Sixteenth-Century English Voyagers*. Univ. of Wisconsin Press, 1968, p. 307.

四 「ラフリ」のロシア語テキストは一八六二年にペテルブルグで出版された「中世ロシア文献集」第三巻の「アレクサンドル・ブイビンの収集になる中世ロシアの偽書・禁書」⁽¹⁾に於いて印刷された。編者でもあるブイビンは「十七、十八世紀の諸写本より」と注しているので、一種の合成テキストである。

トゥリ・ロフによれば、一六二八年、ニージェゴロドのベチェルスキ修道院のさる下僧が「ラフリ」の写本を所有していることが発覚したとき、書物はたちまち没収され

たばかりか、本人は鉄の足かせをはめられて一年間の苦役に服せしめられたという。

十九世紀半ばのブイビンの時代にはもはやその種の懲罰を課される恐れはなかったが、それでも編者は用心ぶかく次のようなコメントをつけ加えている。「この写本で語られる占いは、われらの祖先たちの迷信の名ごり、あるいは暇つぶしのための荒唐無稽なつくりごとにはかならない。ブイビンによるテキストは、上述コレツフ編の一九九〇年の「家庭訓」の末尾にそのまま再録されている。本稿末尾の邦訳の底本として利用したのもこれである。なおこのテキストには何かの理由で欠けている箇所があり、それは「」と……で示した。

(1) *Пакытныкі старыняй руской літаратуры* вып. 3, Ложные и откровенные книги русской старины, собранные А. П. Пыльницким. СПб., 1862, стр. 160-166.

五 ブイビンのテキストによって見るかぎり、「ラフリ」は三個のサイコロを一度に投げるか、それとも一個のサイコロを三度にわたって投げ、目に出た数字の組合せによって吉凶を占うものである。このさい占いの主たる対象となるのは、健康と旅と家族の和合のことであり、そのほかでは「敵」との関係が問題となっている。イワン四世が「百章」で関心をもったのは、もっぱら最後のテーマだったの

である。

ところで、一九八五年にモスクワの二人の研究者トゥリーローフとチェルネツォフは長大な論文を執筆し、新たに自分たちが刊行したテクストにもとづいて、「ラフリ」は同時代の西ヨーロッパで知られた土占い (geomancy) にほかならないという説を発表した。一般に土占いとは、一握りの砂を地上にこぼしたときの形や、紙上の任意の点をつないで出来る図形によって運勢をあてる占いである。

トゥリーローフらの紹介している「ラフリ」はサイコロを用いず、ある平面をさまざまに区切ってそれぞれの枠にあらかじめ番号をつけておく。番号のかわりに何らかの記号でもよい。その平面に骨片を投げて、落ちた枠の数字ないしは記号を得て、吉凶を占うのである。トゥリーローフらの考えでは、この占いは古代のヘルシャあるいはユダヤに起源をもち、ポーランド経由でロシアにもたらされたものらしいという。十七、十八世紀にはロシア国内のもろもろの修道院で大いに流行したようである。

(一) A. A. Гурikov, A. B. Чернецов, *Орпеченная книга Раффин. Груды Отдела древнерусской литературы. т. XL, Лп., 1985, стр. 260-344.*

ラフリ

予言者ダビデ王の占術の書

六六六 海面に光かがやき、この日は明るからん。人びと、すべての正教キリスト教徒は啓蒙の日々を喜び迎える。汝もおのれの運を喜ばん。願いごと、のこらず首尾よく叶う。旅には出るがよし。家のこと、敵のこと、いささかも障りなし。吉。

六六五 光かがやき、この日は明るく、人びとは喜ばん。ダビデ王の語ったとおり……。汝もおのれの運を喜び。願いごと叶う。病気は床ばなれまぢか。旅はしばらく待て。すぐに立たぬがよし。

六六四 神は汝の望みと願いごとを助けたまう。ダビデ王の語った言葉のとおりである。病いは軽し、すぐに起き出でん。家内よく整い、失せ物出でん。吉。

六六三 願いごと、思いどおりなるべし。ダビデ王の語りしごとく「誓い立てればそらごとなし」。汝の願いごと、すべて叶う。病いあれば、祈禱をたのめ。神は健康を与えられん。死と不測の事態の恐れあれば、神はよき道を示されるであらう。

六六二 おのれのあらゆる福を神に願いたければ、貧者に施し物を与えよ。家中を悪魔がかきみだし、家族のあいだに和合なし。家は火を出して燃えており、八方ふさが

り。

六六一 汝は光から闇にふみこもうとしている。何に望みを託してか。ダビデ王の語りしことは、「主イエス・キリストは正義なり。まことを愛でしがゆえに」。汝も悪よりはなれ、悪の声に耳をかたむけるな。いずれ良きことあるべし。病い、旅、金錢のこと、ならびに敵について、用心が肝要。凶。

六五五 この答は汝の心にかなうべし。汝の願いごとはダビデ王の語りしごとく、「わが敵はあざむかれ、重き荷をわれに負わせた」。されば、汝はおのれの悲しみを神にゆだねよ。心軽くならん。病いはすこやかになり、家の中に神やどるべし。旅、つつがなく道中はかどる。敵は相手こそ汝を恐れている。神に祈れ。

六五四 この答は汝にとってにがく、汝を悲しませません。心当るふしあるや否や考えよ。もしあれば、「われに耳をおし当てよ」というダビデの言葉どおり聞きとること。されば汝はそしらぬ顔してしばらく待て。病いは重くとも死ぬることなし。旅は立たぬがよし。敵を恐れよ。かたわらにあり。

六五三 鹿の角をつかまんとしても、鹿は野に逃げ去って久し。汝はことをおこすのを延ばせ。考えはよし、時期は尚早。

六五二 一方を見れば、ティベリアスの海(ガリラヤ

湖)、その底は銅の色をしている。主はこの海でおぼれかけたペトロを見かけた。ペトロは大声で叫んだ。「主よ、主よ。海底からひき上げたまえ」。主はペトロの願いを聞き、天から下りてペトロを海底から救い出された。ペトロは主の光を見て喜んだ。されば汝はおのれの運を喜べ。病いあれば、主は強壯な健康をさすけられん。家中に福あふるべし。敵を恐れるならば、神に祈れ。

六五一 使徒ペトロが歩んでいたとき……大いなる災厄をくだし、地上にも草のあいだにも豊かな葉やいかなる木の実もなくするならば、占いの示すところは凶。病いあれば、それより死に至り、家の中には悪臭紛々。旅は災難を恐れよ。敵に用心せよ。凶。

六四四 大鷹が雀をつかまえた。雀は大鷹の爪からのがれんとするが、身をふりほどけない。されば、汝は他人の手からのがれんとするな。かねての企ておこさぬがよし。大鷹が雀をひきさくは恩を着せるにあらず。家中に大いなる窮乏あらん。病いは重く、死おとずれべし。新しき場所に移りたくとも、行くな。出かければ災難に逢わん。敵を恐れよ。

六四三 主が人に言われた。「ありとあらゆるものが汝にゆだねられている。知恵と技芸が地上の汝に与えられ、空飛ぶ鳥と水を泳ぐ魚が汝の手中にある」と。これを解けば、病いは長いわずらいののち、神から健康をさすかるべし。

し。家に異変なく、旅は障りなく、敵は相手こそ汝を恐れている。

六四二 助言者が甘言をもって何を得んとするか、われらにはわからぬ。汝の敵がすぐかたわらにあって機会をねらっている。これを解けば、家内に不満昂じて和合なし。汝にとって好ましからざる封。

〔六四一〜六三二欠〕

〔六三一……〕旅は道中よろし。悲しみが汝をおそうとも、最後は喜びをもって終わらん。

六二二 旅はよし、されど罪あり。主は、汝の願いを叶えられるに病いをもってすれど、祈りによって神はその病いをいやしたまわん。耐えれば、良きことあるべし。幸が不幸に打ち勝つ。このことについては自分の頭で考え、行動せよ。敵をさがし当てれば、解決かなう。汝の受けとる賄賂は常ならぬもの。

六二一 町は石づくり、柱は鉄、銅の門はかたく閉じられている。危険を冒すな、おのれの魂を破滅させぬよう。悪からしりぞき、善をなせ。助言にはしたがわぬがよし。病いにかかれれば死ぬ。家のことは骨片の示すとおり。旅には立つべからず、あまたの暴力をうけるであろう。敵を恐れよ。

六一一 ティロンの聖テオドロスが鷹を連れ馬に乗って野原におもむいた。鷹が鷹をつかまえ、テオドロスは上

首尾に歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。神が汝を助けたもう。病い、旅、ともに喜びあり。借財を戻せば、汝もまたわずらわしさあれども受けとるべし。敵に打ち勝たん。

五五五 アブガル王が病の床にあったとき、主はこの病いをいやすために天使をつかわされた。アブガル王は主の現われたことに歓喜した。同様に汝もおのれの運を喜ばん。病いは癒え、家内和合、失せ物出さずべし。旅はつつがなし。

五五四 願いごと叶い、心は満ち足りん。「主よ、狡猾な者よりわれを救い、邪まなる者から救いたまえ」とダビデ王の語ったとおりになるであろう。病いは去り、家内和合、旅つつがなく、失せもの出さずべし。

五五三 ある巡礼が神の使徒のもとにおもむき、栄光の宝座に近づいて、分別をさすけられんことを執拗に祈った。病は癒え、家内に不足はないが、旅には出るな。そのわけは、敵があつて汝に悪を企んでいるから。

五五二 汝の考えることは罪多く、益が少ない。我執を去り、私心を捨てよ、されば良きことあるべし。さもなければ、災いあらん。災いをこうむるのは、我執が邪悪なゆえである。病いは死にいたり、家内は何びとの手にも負えぬ。

五五一 主がサマリヤの女のもとへ来て、飲み水を乞

うて言われた。「女よ、わが贈り物のことを知りたれば、汝は生き水を与えんものを」と。女は主が現われ、大いなる贈り物をさずかることを歓喜した。同様に汝もおのれの運に喜ばん。病いあれば、すこやかにならん。家は整い、敵は汝を恐れている。

五四四 われらの主イエス・キリストがベツレヘムで生まれたその日、東方にかがやく星があらわれ、全世界を照らした。こうしてすべてのキリスト教徒が神の出現に歓喜した。同様に汝もおのれの運を喜ばん。病いはまもなく癒え、家の中に足らぬものなし。新居への移転はしばらく我慢せよ。さすれば上首尾の見込みあり。

五四三 銀と鉛をいっしょに量るのはよくない。かかっていることをなさぬよう、汝も神に祈れ。汝の考えは正道に向いていない。病いあれば、重かるべし。旅には出るな。道中に死あり。敵が危害を加えようと企んでいる。凶。

五四二 われらの主イエス・キリストが使徒たる弟子たちをしたがえてタボルの山に登られたとき、主は水を含んだ雲を祝福してワインに変えられた。弟子たちは主の御業に歓喜した。同様に、汝はおのれの運を喜ばん。神は汝を助けたまわん。病いあれば癒え、家内に足らぬものなく、旅の道中は安全。悩みあれば消え失せるべし。吉。

五四一 天の御使いが声を出して告げた。「女よ、立て。死が近づいている。汝の子を連れてエジプトの町に去

れ」と。女は子が死を免れたことに歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。病いあれば、すこやかにならん。祈禱をたのんで他のもろもろの災厄からも免れるべし。主が汝をあらゆる災厄から救われるのである。吉。

五三三 聖使徒ペトロとアンデレが海に出て主の言葉どおり網を投げたとき、主は多くの魚をさづけられ、網をひかずとも、主は小舟を魚で満たされた。主はその後も約束されて、それ以上……同様に、汝の願いごとすべて喜びもて叶えられん。病いはまもなく去り、家内には福と喜びあらん。移転よろし。敵から名譽を受けん。吉。

五三二 海に船がうかび、大勢の人が航海していた。各自多くの財物をもっていたが、恐ろしい嵐がおこり、大波が船を岩にたたきつけ、こなごなに打ちくだいた。多くの人びとが死に、すべての富が失われた。汝の運もこれにひとしい。汝はだれかれとなく人を愛しているが、親切に對して受けるのはあだのみ。家内に幸せなく、それを願うもおろかなり。凶。

五三一 明け方、香油をたずさえた女たちが泣きながら主の墓をおとすれ、かたわらの石にすわっている天使を見た。天使は彼女たちにこうたずねた。「死者のあいだに生者をさがるのか。キリストは三日目によみがえった」と。女たちは主がよみがえられたことに歓喜した。同様に汝もおのれの運を喜ばん。何ごとであれ、汝の願いごとに神の

助けあらん。病いも家内のこともすべて順調にいく。

五二二 神が汝に道を示され、何ごとにおいても汝に成功と神の恵みと恩寵あらん。ダビデ王が「汝は家畜と人びとのため」と語ったごとくである。同様に汝の願いごとく、まずは銀、第二に利得、いずれも叶えられ、旅に出ては人にあがめられ、神の助けあらん。心ひそかに願いたることをすべて首尾よく成就、望みどおりに福を得ん。

五二一 主イエス・キリストのため汝の祈りは欠かされぬ。汝は大いなる利得と心の喜びを得るべし。家内のことならば、悲しむには及ばない。よく整っている。道中はよし。酒宴に出会い、人びとから名譽を受けん。

五一 一 時をきめ、旅に出るばかりに準備せよ。ダビデ王の語ったごとく、「わが身を守り、憐れみたまえ」。同様に汝は心を強くたもて。神は汝をあらゆる悪から免れさせたもうであらう。悲しむな。ことは汝の思いどおりにはこび、見通し開けん。汝のもくろみはよろし。

四四四 時がきて、汝のわざは成就するであらう。「もろもろのことわれに向かいてあつまる」とダビデ王が語ったとおりである。されば汝は用心せよ。敵は汝のかたわらにある機会をねらっている。旅は無益、よきことなからん。凶。

四四三 二羽の鳥がティベリアスの海を横切つて飛ぶ、うるおえる榎の木の頂に巢をいとなみ、つくつた巢でひな

をかえし、鳥のつがいは巢とひなに歓喜した。同様に汝もおのれの運に喜ばん。旅のこと、家のこと、敵のこと、すべて喜びとともに成就するはず。結婚を望めば、実現せん。

四四二 何びとについても、願いごとを明かすのを恐れよ。なげくべからず。「おのれの悲しみをすべて神にゆだねよ。神が汝の望みを成就せん」とダビデ王が語ったとおりである。旅のこと、家内のこと、病いのこと、すべて憂いは消えるであらう。汝のもくろみは達せられる。

四四一 神は汝の願いを喜んで聞き入れられる。汝は運に恵まれ、敵に打ち勝ち、力にあふれて立ち上がらう。病いと転居よし。敵は恐れるにおよばず。念願すべて成就。

四三三 兎が草の上を駆けていき、畏にかかる。だが畏から身をふりほどき、かなたの森へ一目散。兎は自由の身に歓喜する。汝もおのれの運に喜ばん。何ごとにおいても神は汝を助けたもう。病いならば、まもなく床ばなれ。逃亡した奴隷は戻り、失せ物が他人のもとから出る。神は何ごとにおいても汝を助けたもう。

四三二 何ゆえ貧窮にあつておのれの知恵をためし、流れに逆らつていかなる利得を得んとするや。わが身の性に用心せよ。生ずる利益は大きいが、汝は多くを望みすぎる。そのような利益から死まではほど遠からず。旅と家内のことならば用心にしくはない。凶。

四三一 何ゆえ汝は我執にとらわれ、意地をはり、益

もないことにこだわるのか。世のため人のためにを思い、神に祈るのが身のためではないか。悪を去り、善をなせ。邪に仕えるならば災いおとすれ、病氣もなおらないだろう。借財を返せば、汝も貸したものを受けとらん。ただ、わずらわしさはあるべし。まもなく良運に恵まれるはず。

四二一三 つばくらが餌を求めて東から西へ飛びながら、汝に良き知らせもたらさん。すなわち、汝は事業に成功し、敵どもはおとなしくなり、汝は力にあふれて立ち上がることであろう。ダビデ王が「主よ、わが魂を悪とあらゆる敵たちから救いたまえ」と語ったごとく、神を頼め。旅と仕事、急ぐべからず。願いごとほどなく叶うべし。

四二二一 それゆえ汝よ、大地がふるえ、大海原の海底で濁り水がざわめき逆巻こうとも、恐れるな。胸の中で育んだ考えを隠せず述べて、節を曲げぬがよい。ダビデ王が「神こそわが頼みの綱と力」と語ったとおりである。されば事にさいして神に望みをかけよ。すべて思いどおりにならない。旅と新しい場所へは行かぬこと。自分の考えを捨てず、ふたたび運を占え。

四二二一 主が弟子たちとともに船でティベリアスの海をわたっていたとき、嵐がおこって荒波が立った。船にいた弟子たちは悲しんで神に祈りはじめた。すると主が立って海の風を静めた。海はたちまち凪ぎ、弟子たちは主の御業に歓喜した。同様に汝はおのれの運を喜ばん。願いごと

すべて叶う。旅は障りなし。

三三三 仕事よし。主は汝の願いを叶えられん。ひるまぬこと。今まで親しくなかった者と親しむな。あざむかれぬためである。決心はすぐにつけぬがよい。人にゆずれ。それは難事にあらず。思いまどわぬこと肝要。新規にことをなすな。病いの恐れあり。病い回復は望みなし。

三三二 モーゼはエジプトからユダヤ人を連れ出したとき、自分の杖をふるって紅海を二つに分けた。ユダヤ人たちは海をわたったが、エジプト人たちはのこらず水にのまれておぼれ死んだ。これを解けば、兎が逃げ去り、獵師がおぼれたにひとしい。敵に用心をおこたるな。旅と新居へは出ぬがよし。凶兆。

三三一 レバノンの杉より高い人を見て、近づくと影もなし。さがせども、見つからぬ。仕事は順調、神に望みをかけよ。敵は汝から逃げ、汝は敵に打ち勝つべし。されど、汝の考えは益なし。まどうな。別の卦の出るまで待つがよし。

三二二 したがって、汝は海をわたることを企てたれど、そのゆえんを知らず。露の間待て。幸運と神の恵みあらん。ただひたすら毎日毎時、神に祈れ。願いごとかならずや叶い、首尾よからん。

三二一 すべては汝の手にゆだねられてあり、汝の畑は汝の飢を満して償いを求めず、汝の家を富ませ、美しき

荒地は人の住まいとなり、谷間に丘が連なり、それは小麦の粒さながらにおびただしく増え、人の名を呼んでほめた。汝の願いごとを叶うべし。ひたすら神に祈れ。仕事は順調、病い癒えん。

三一 神よ、汝の道がよみがえった。人よ、汝の道もとのい、門は開かれている。ダビデ王の語ったとおり、「われを助ける者は天と地を創られし神なり。」かくて、汝の願いすべてを叶う。旅には喜んでたて。ほかのこともすべてよし。吉。

二二 主がわが主人に言われた。「汝の敵をひざまずかせるまで、わが右手の側にすわれ。汝の敵が足もとにたおれるであろう」。もし領地を手に入れ、よき人びとと交わることを望むならば、しばし耐えよ。主みずからユダヤ人どもの仕打ちを耐えたように。汝も同様である。事は

やがて成就せん。ただ神に祈ること。

二二 一 もしも汝に悪しき敵あり、彼らが羊を襲う狼のように汝をつけ狙い、汝を不意に食い殺そうとしていれば、神の恵みを得て、剣と盾をとれ。罪をおかさぬよう戒心せよ。心によき考えのみをもつこと。

二二 一 ある愚か者が心の中でこう思った——「人はみな放蕩をしている」と。汝の魂は放蕩を好み、仕事は成就するとも、思いは海の波さながら、あなたこなたにただよっている。考えを改めよ。死を警戒せよ。凶。

二二 一 神に祈れ。汝の願いごとを神が助け、叶えられん。されど心に完全な愛をいだくべし。人は善行の中でのみ愛を保つものだからである。愛なくばすべてはむなし。始めよければ、終りに益あり。

(一橋大学教授)